

8-4		主題	弘済園における「終末期の看取り介護」への取り組みについて	
看取り		副題	「看取り・死」は特別なことではなく、身近な出来事である。	
支える				
研究期間	12ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 弘済園	
発表者：リサーチャー：佐々木裕子（ささきゆうこ）			アドバイザー：	
共同研究者：リサーチャー：波田野友美 リサーチャー：木林憲一郎				
電 話	0422-47-8965	メール		
FAX	0422-41-1783	URL	http://www.kosaien.or.jp/	

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人東京弘済園は、高齢者福祉事業を行うため、昭和 30 年に財団法人鉄道弘済会によって三鷹市に創立されました。以降、高齢者福祉の各分野の事業に先駆的に取り組んでおります。また、平成 20 年からは保育園も併設し、園庭では、異世代交流も行われております。特別養護老人ホームは、定員 100 名、ショートステイ 10 名です。
------------------	---

《研究前の状況と課題》 看取り介護に携わる全ての職種・職員と相談・連携を確認し利用者や家族の意向を出来るだけ尊重したケアプランを作成してスタートしたが、いざ「看取り介護」を始めると、様々な部分で疑問・不安が出てきた。その為、利用者や家族に安心して終末期の生活を過ごして頂けるような介護を職員が提供できるためにも、随時ケアを見直し「看取り介護」が終わる度に、携わった全ての職員から意見を集約し改善点をピックアップして誰でも解るように具体的にケアの方法を文章化にすることにより、看取りに必要な課題が見えてきた。	《研究の目標と期待する成果》 ① 利用者・家族に安心・信頼を得られるケアの提供。 ② 職員が「看取りケア」を落ち着いて実行できるようにする。 ③ 職種間の連携を円滑に行う為の情報の共有化、死は身近なものであり特別なことではない。 「看取り対応」ではない利用者の方に提供している介護のように自然に振舞えて、精神的な支えも出来るようになることを目標に、「看取り介護」が終わるたびに、マニュアルの見直しに取り組んだ。
---	---

《具体的な取り組みの内容》

「看取り介護」のケースを重ねて経験していく中で、2つの事例について焦点を当てた結果いくつかの改善点が明確になってきた。

- ① 利用者はどのようなケアを必要としているのか？職員は具体的に何をすればいいのか？

→A4サイズの手紙にまとめ、看取り専門ファイルに閉じている。

- ② 家族は職員にどのようなケアを希望しているのか？

→「看取り介護」は医師より診断について家族に説明し、看取りを希望される場合には当園の「看取り指針」「施設における看取りについての同意書」「看取り介護計画書」の説明を行い、同意を得て開始される。

この時期に、家族からの要望を聞き、出来る限りの事を援助していく確認をする。

- ③夜勤帯に息を引き取られた場合、夜勤者は何をすればいいのか？

→A4サイズの手紙にまとめ、看取り専門ファイルに閉じている。

- ④職員教育の一環として「看取り介護」についての勉強会を実施。

《取り組みの結果と評価》

以上の改善策をとった結果、職員の動きに迷いが無くなり日常の介護を行うように、自然に振舞うことが出来るようになってきた。また不安に感じたことなどは、すぐに相談、解決できるような雰囲気にもなっており、職員が一丸となって取り組めるようになってきた。

家族の方に対する声かけ、想いにも、気遣いが出来るようになってきた。

《まとめ》

「最期の時」を家族と職員で看取った後、家族からの感謝の気持ちを頂いたとき、有難いと思うと同時に、看取りの主役はあくまで利用者と家族であり、職員は常に黒子でなくてはならないということを肝に銘じている。また看取りを体験し、ひとまわり大きく成長できたことを確認しあい、次の「看取り」がさらに、よりよいものになるよう振り返りを実施していくことが大切だと感じている。

《参考文献》

《提案と発信》

利用者が、その人らしい「最期」を実現するために、様々なスタイルがあってもいいのではないかと「看取り介護」を経験して思いました。これを実現するためにも、弘済園では今後も「看取り介護」に前向きに取り組んでいきます。

【メモ欄】